

『重度重複知的障害高等部生徒の「できる」を発見し「できる」につなぐ』

－作業学習におけるマッチングをとおして－

The discovery of [dekiru] of the advanced and doing for student of the severe mental retardation,
－Research of "Matching" in Work study－

○脇坂陽介¹⁾・朝野 浩²⁾

○WAKIZAKA Yousuke¹⁾, ASANO Hiroshi²⁾

福井県立南越養護学校・立命館大学

Nannetu Support School of Fukui Pref./Organization for Teaching Training Advocacy,
Ritsumeikan University

Key words: 重度重複知的障害, 作業学習, 機能としての「できる」
severe mental retardation, work study, function analysis of ability

目的

特別支援学校高等部に在籍する重度重複知的障害生徒の卒業後の地域の福祉就労施設での活動を想定し、作業学習を通して生徒の「できる」を発見し、主体的、自立的に「できる」人として社会参加することを目指す。

一般的に作業学習においては、重度重複知的障害生徒の適応できる作業種目は、非常に限定されていることが多い。しかも、一工程止まりの単純な繰り返し作業で、一対一指導等が多く見受けられる。また、卒業後の就労予定施設側からは、「うろろうしない」「着席して作業ができる」など手の掛からないことを条件として提示されることが多い。そこで所謂、作業能力的にできないと思われる重度重複知的障害生徒の「できる」についての発展性や可能性を引き出すための手だてや気づきの視点、環境設定の在り方について検討する。

方法

1) 対象生徒

対象生徒は現在高等部3年生である。障害状況は、知的重度(測定不能)、先天性視覚障害(網膜変成症、弱視)、視力は「指数弁」約0.3程度と思われる。通常の歩行や作業時などの日常生活では両眼視であるが、一生懸命に見ようとするときは左目を手で押さえ15・20cm近づけて見る。音声言語は認められないが、表情や身振りなどで要求を伝える。指導者側の指示については、日常会話程度の指示理解ができていると行動観察からうかがわれる。音に関しては田畑の畦の水路の流れる音やモーター音に興味関心があるようで、じーっと聞き入りうれしそうな表情になる。作業学習では手探りで作業することが多く、力仕事はできていない。視覚支援としてのカードやタイマーなどを使用するよりも、見本提示や手を添えたり、声掛け、音響付きタイマーの方が有効である。

2) 作業内容

H21年度は工芸班で空き缶つぶし等で一対一で要介助であった。H22・23班は木工班。工程分担は木製椅子

の座板研磨とねじ穴(両端2カ所×3枚)の見当印付け作業で、指導者が約2m離れて側に付いている。

- ① 座板置き場から6枚選んで運び箱(6枚)に入れる。
- ② 運び箱から3枚出し座板研磨台(ジグ・3枚)に並べる。
- ③ サンダーのスイッチを操作して研磨する。
- ④ 座板にスライド式のねじ穴見当台をのせる。
- ⑤ ねじ穴見当台(片側2穴×3枚)の穴に鉛筆立てから鉛筆をとり差し込む。(最初は鉛筆立てをねじ穴見当台に置いたが、今学期は研磨台の左側に置く。)
- ⑥ 差し込んだ鉛筆を上から軽く叩き印を付ける。
- ⑦ 鉛筆を元の鉛筆たてに戻す。
- ⑧ ねじ穴見当台をスライドさせ戻す。
- ⑨ グライダーを掛ける。
- ⑩ 磨けた座板をスタンド(12枚入り)に立てる。

*現在は座板を12枚準備し②から開始。⑨の後ボール盤担当者に印を付けた座板を運び渡す。

3) 手続き

③～⑦の作業動作で鉛筆を全部入れきらなかったり、全部抜き取らないことがある。その都度言葉と手を添える等強いプロンプトにより作業を遂行させた。視力及び注意力の不足等、障害によるものと考えていたが、座板運び箱や見当穴に鉛筆を一対一対応(同一の機能)していることから、自発的な作業遂行をするために、強いプロンプトでなく他の手続きの有効性を検討し、改善した。

- ① 手が止まっているときに「次は」と言葉かけをする。
- ② 手が止まっているときに注意喚起として「肩を叩く」。
- ③ 鉛筆を残したままジグ盤を引くと引っかかり間違い(全部戻し切れていない)に気づかせる。
- ④ 手で触って、残っていないか確認させる。

結果・考察

戻す鉛筆たてを12穴にし、最後に触って確認する。不足のときは、座板盤を触って戻すことができた。障害によってできないと決めないで、今あるできることの同じ機能を使って、できる環境を作ることが大切である。